

ドラッグと現代社会

佐藤哲彦 社会学

先日久しぶりに、調査で知り合った女性から連絡をもらった。彼氏と共に関西に移り住んでいたが、数年ぶりに東京に舞い戻ったという。そこで驚いたのは、以前よりもはるかに多い仲間たち。ドラッグ使用者の存在だとか。実際、最近また増えているようだ、私自身いるんじゃないかと耳にしている。

しかしながら、ドラッグ使用者が増えたところで、わが国の政策は相変わらず代わり映えない。「悪いものは悪い」の一点張りで、しかも何かが流行るのに伴って、禁制品目が増えていくばかりである。とはいえ、私は何も禁止するのが悪いといっているのではない。そうではなく、禁止するのもまた、ドラッグ政策の選択肢の一つに過ぎないということ、そしてそれが政策である限り、私たちがもっと主体的にこの政策について議論してもいいのではないかということである。

現在私は、数年来の約束で『覚醒剤の社会史』なる本をまとめている。この本は、日本の代表的なドラッグである覚醒剤が害悪とされてきた経緯を、覚醒剤をめぐる科学的知識の成立にま

で遡って明らかにしていくものである。というのは、ドラッグはそもそもからドラッグであるわけではなく、人間や社会との関係の中でドラッグとなるからであり、したがってそこには、われわれの社会のありようが刻まれているからである。一方私はこの間、わが国のドラッグ政策を世界的な文脈で考えるために、主として欧米の政策を、長期間現地で調査をしながら研究してきた。その作業によって見えてきたのは、個人の自由な振舞いと社会秩序との折り合いを、どのような形でつけようとしてきたのかという葛藤の軌跡である。特にここ二、三十年の各国のドラッグ政策は、その人間観や秩序観を如実に反映していて興味深い。覚醒剤政策研究が仕上がったあかつきには、わが国ではあまり知られていない欧米のドラッグ政策を、社会的に解き明かした本を出したいと考えている。

（本文七九九字）